

# ニコラウス・クザーヌスの人間論

坂 本 堯

## Ⅰ 序

この論文は、中世末期、ルネッサンス初頭に活躍した独特な思想家、ニコラウス・クザーヌスの人間観をとりあげるのであるが、ここでは特にその時代の特徴と意義を明らかにする面に考察の光をあてたいと思う。

一般にクザーヌスを伝統に忠実な思想家として見る研究者に対して、伝統に反対して新しい哲学を教えたと考える人がいるが、伝統を原理的に批判しつつ、自己の認識論的、形而上学的原理の発見に努め、すでに始まっていたルネッサンスの思想に適した哲学と神学を形成しようとしたのが、クザーヌスの思想形成の主眼点であると言えるだろう。

いま、彼の人間観を見ると、それが、彼の世界観と科学・哲学と神学に深く結合していることを無視することはできない。そしてまた、彼が思想家であると同時に実践家であって、人間観を形成していくときに、決して書物からではなく、生きて社会の中に実際に活動する人間の現象を見、その人間に全力で働きかけていくことによって、その問題の解決を発見していったことも、忘れてはならない。

クザーヌスは当時の科学的精神を、キリスト教的敬虔と共に尊重した人であったが、それは、彼の人間観の中にも深く根を下している。クザーヌスは、この科学的精神をもって個人と社会の諸現象を、客観的に観察していったのである。

いま、彼が生きたルネッサンス時代の人間観の特徴を、簡単に示すと、次のような諸点に要約できると思う。

(a) 人間の世界における地位が重要視されるようになり、程度の差こそ

あれ、人間中心主義が起ってきた。

(b) 人間は世界の尺度であって、世界のすべての出来事は、人間がその規準となって判断し処理する。

(c) 人間は、大きな創造的力を持ち、この世界の中に、自己の芸術と文化を形成していき、この発展は無限に広がって行く。

(d) 個人は、自己意識に目覚めて、自己の固有の価値を発見した。ハンス・マイヤーは、これについて「……個人主義は、中世の生活統一性には、不適合であった。個人は、普遍的カテゴリーの下に家族の一員、身分、団体、民族、教会の所属者としてのみ考えられた。中世末期の唯名論に開拓されたものは、ルネッサンスにおいて、ずっと強力に現われたのである。すなわち、個人は、自己意識に達したのである云々<sup>(1)</sup>」と述べている。

(e) 現世的世界を評価尊重し、来世の彼岸よりも、現世の発展により多く意義を見出す。

ピコ・デラ・ミランドラの「人間の尊厳について」を訳した植田氏は、その解説の中でルネッサンス的人間観の特徴として、「美を尚ぶ傾向のある精神的態度と観察法、できるだけ完全性をめざす内的外的形成への努力、自己をいわば芸術作品にまでたかめようとする渴望、さらに自らの力を持ち、他人のことを顧みずに自分の意見を発表する強烈な個性の意識、<sup>(2)</sup> 独創を尚び創造的で行動的であろうとする意志」などをあげている。

しかし、クザーヌスは、人間の宇宙における位置を、ピコ・デラ・ミランドラのように神より独立したものと考えず、中世の伝統に従って、神とその似像としての人間の間にある深い依存関係を認めるのであって、ここに中世のキリスト教の伝統が強く存在している。

この論文は、ニコラウス・クザーヌス思想における人間観の伝統的な面とルネッサンス的な面とを、かれのテキストの分析を通して、明らかにしたいと思う。

## Ⅱ クザーヌスの人間観に関する研究の概観

1920年にE・ファンステンベルグは、その著「ニコラウス・ド・キュー  
(3)ス」の中で、クザーヌスの人間観が、「神の似像」(imago Dei)の思想と、  
「ミクロコスモス」(micro-cosmos)の思想を基礎とし、その宇宙における  
人間の高い位置を主張していることを認めている。<sup>(4)</sup>

1927年には、E・カッシーラー(E. Cassirer)は、「ルネッサンス哲学に  
おける個人と宇宙」の書を著わし、クザーヌスの人間観が、人間の個性を  
中心にしていることを解明し、この点において、クザーヌス思想の研究に  
大きな貢献をしたのであるが、これについては、K. H. フォルクマン・  
シュルック(K. H. Volkmann-Schluck)<sup>(5)</sup>が言及している。

さらに1929年には、E. ホフマンが、E. カッシーラーの考えをクザー  
ヌスのキリスト論によって補足発展させている。<sup>(6)</sup>

しかし、ニコラウス・クザーヌスの人間学を直接研究の対象に取上げた  
のは、1928年の、B. グロエトウイゼン(B. Groethuysen)の、<sup>(7)</sup>  
Nicolaus von Cusa : Philosophische Anthropologieである。かれは、クザーヌス  
における人間観がまず神と人間との関係の認識論的考察に根拠をおいて  
いることに注目し、「人間は自己が絶対者を把握しえないことを識っている。  
人間の王国は、相対者の王国である。そして超えることのできない分離の  
壁が、彼を無限者より距てている。しかし人間は、この壁のこちら側に、  
彼の世界、彼の固有の世界、彼が造り出す世界をもっている。ここで彼は、  
すべてのものを相互に結合し、自己自身に関係づける。人間は、この世界  
の主であり、彼の世界の神である。しかし、止むことのない憧れが、人間  
を別の世界に駆り立てる。人間の世界は彼を満足させない。そして人間は、  
把握しがたい理解できない神を追求するのである。」<sup>(8)</sup>と言う。さらに、ク  
ザーヌスの人間論では、キリストと人類との関係が、その人間観の支点に  
なっていることを示し、「キリストについての考察が、クザーヌスの人間  
学<sup>(9)</sup>の中心を形成している。」と述べている。

以上のことから、グロエトウイゼンは、結論して、クザーヌスの人間観は、まず人間を感覚的なものを精神化する存在、自立的存在、自由な精神的存在<sup>(10)</sup>として教え、人間が人間として固有の存在を保持し、完成する自足性を持つと考えるのであるが、しかし、この自足性は、究極的なものではなく相対的なもので、究極的には、キリストの中に人となった神自身にあると主張する。

1938年に、ウィーン大学に提出されたH. ペチョヴィク (H. Pechowicz) の博士論文「ニコラウス・クザーヌスの哲学における人間の位置」は、クザーヌスの人間観について広い研究を発表しており、人間認識の中の四段階、感覚的、理性的 (ratio) 知性的 (intellectus)、神秘的認識、および、神の似像としての人間、倫理学の基礎としての人間の自由とその靈魂の不滅性、ミクロコスモスとしての人間などを取上げている。

1942年には、モーリス・ド・ガンディヤック (M. de Gandillac) が、ニコラウス・クザーヌスの哲学について広翰な著書、「ニコラウス・クザーヌスの哲学」<sup>(11)</sup> (La Philosophie de Nicolas de Cues) を出版したが、クザーヌスの人間観についても、人間存在の有する動的な内的統一性、人間性の高貴性、宇宙の中における人間の位置などについて論じている。

しかし、クザーヌスの人間論の時代的特徴を、もっとも明らかにした研究は、1957年に出版されたK. H. フォルクマン・シュルックの「ニコラウス・クザーヌス、中世より近世への過渡期<sup>(12)</sup>の哲学」であって、著者はその中で、クザーヌスの人間観が、前述のルネッサンス的人間観の特徴を有していることを明らかにしている。

1961年には、チャールス・フンメル<sup>(13)</sup>の「ニコラウス・クザーヌス、その哲学における個別性原理」という著書が出版され、クザーヌスの人間観の主要特徴である「個別性」の問題が、種々の観点から取上げられている。その後1964年に、カール・ヤスパースが、「ニコラウス・クザーヌス」の著書の中に、クザーヌスの人間論の諸問題、「神の似像としての人間」「第

二の神としての人間、人間精神の偉大さ、小宇宙としての人間、個人としての人間」などを取扱っている。

1967年の私の論文、「ニコラウス・フォン・クースにおける人間の尊厳について」は、人間の価値とその実現という観点より、クザーヌスの人間論を総合的に研究したものである。また、クザーヌス学会の学会誌に、最近、ラインホルド・ワイヤーが、「人間についての現代的討論への寄稿としてのクザーヌスの人間論的発端」という論文を発表し、クザーヌスにおける人間論の意義と、その目的論的傾向、進化論的傾向、キリスト論的傾向を明らかにしている<sup>(14)</sup>。

### Ⅲ クザーヌスの人間観の要点

#### (1) ミクロコスモス（小宇宙）としての人間

クザーヌスが人間に附加する名称または叙述によって、彼がいかなる人間観をもっているかが知られるが、それによって、宇宙の中における人間の地位、換言すれば、存在としての価値が明らかになる。クザーヌスが、人間に附する名称は、まず「小宇宙」(microcosmos)<sup>(15)</sup>である。人間性が、感覚的・精神的世界の双方を包含し、その感覚、理性(ratio)知性(intellectus)の機能を通して、大宇宙(macrocosmos)のすべてを認識し理解することにより、その意味で、宇宙のすべてのものをその中に受入れ、統一した世界像を形成するからである。

また、この人間を小宇宙と見る考えを、クザーヌスは、「神の似像」としての人間の理解に結びつけている。人間は、神の似像として、可視的世界の最高の位置にあり、すべての被造物は人間に秩序づけられるので、人間はこの世界の支配者であり、それ故に小宇宙と言っている<sup>(16)</sup>のである。

さらにクザーヌスは、人間・小宇宙の考えを彼のキリスト論に関連させ、人間が小宇宙として全く充実な光栄を得たのは、父なる神が、再び宇宙を建てなおすために遣わされたキリストの中においてであると言っている<sup>(17)</sup>。

ここに、クザーヌスの思想が、人間論においてもキリストを中心とし、このキリストにおいて哲学と神学が融合する結合点が存在するのである。

この人間・小宇宙の考えは、クザーヌスの晩年になるほど、神との比較関連によって理解されるようになり、神が大宇宙に現存するのは、丁度人間の精神が小宇宙である人間に現存するのと類似していると言われる。大宇宙が、この神の現存によって、一性的な宇宙的全体となるように、小宇宙である人間も、その靈魂がその力と作用で、身体のいかなる場所にも同時に存在するので、小宇宙として人間が、一つの全体となると述べている<sup>(18)</sup>。クザーヌスはその死の前年に著した「叡智の探究について」(De venatione sapientiae)のなかで、大宇宙の美しい秩序を讃美し、それを天上の秩序の似像と考え、その大宇宙の秩序の結合が、この小宇宙たる人間によって達成されると述べる。また、キリストの人間性においては、感覚界と精神界が結合されるばかりでなく、時間と永遠、創造主たる神が結合されるのであると述べている<sup>(19)</sup>。

この人間・小宇宙の考えは、クザーヌスのもとでは、さらに類似の表現「人間は世界(mundus)である」<sup>(20)</sup>あるいは「人間は、『高貴な王国』(regnum nobile)である」<sup>(21)</sup>などで補足される。ここで高貴(nobile)と呼ばれる根拠を、クザーヌスは人間が有する自由意志(liberum arbitrium)と倫理的善悪の判断、善はなすべし悪は避くべきという自然法の根本的原理認識に置くことは彼の人間観が倫理的価値判断と深い関係を有していることの証拠である。

## (2) 万物の尺度としての人間

また、クザーヌスが教える人間観の特色として、「人間は事物の尺度である」homo-mensuraの考えが存在しているので、この点で彼はプロタゴラスの思想を評価継承する<sup>(22)</sup>。

しかしクザーヌスは、このhomo-mensuraの考えを、キリスト教的創造論によって解釈するので、プロタゴラスにみられるような、相対主義を

主張しているのではない。このことは、クザーヌスの世界創造における人間の意義を比較しつつ考察することによって明らかにすることができるので、次の二つのテキストを引用したいと思う。

“Voluit autem deus quod homo esset finis omnium corporalium naturarum propter intellectum, et quod ipse deus esset finis absolutus omnium intellectualium naturarum…… ita deus pariformiter voluit creare hominem qui est infimus in intellectuali natura, ut quum illum elevaret ad participationem infiniti regni, omni possibili modo divitias gloriae suae excellentissime manifestaret.”<sup>(23)</sup>

“Nam dum scit animam cognoscitivam esse finem cognoscibilium, scit ex potentia sensitiva sensibilia sic esse debere, sicut sentiri possunt; ita de intelligibilibus, ut intelligi possunt, excedentia autem ita, ut excedant. Unde in se homo reperit quasi in ratione mensurante omnia<sup>(24)</sup> creata.”

以上のテキストを総合すると、クザーヌスにとって神は、自己の富と完全性を示すように被造物の世界を創造するので、この創造における究極的な目的は神御自身であるが、この目的が実現されるには、被造界の完全性を認識できる精神的被造物が必要である。それが、被造界の可視的世界とその創造者を認め愛する人間である。もし、神がこの人間の認識に適合しない世界をつくるならば、神は、創造の目的を達しないので、不合理なことを神がすることになるだろう。従って、神は、人間の認識力を規準に(mensura)して世界を創造しなければならないということになる。

この意味で、人間は神が創造した世界の規準となる。同時にまた、人間は当然、自己が創造する世界の計画者であって、その作業の規準である。ここに、クザーヌスのルネッサンス思想が、明瞭に現われている。それによると、人間は先ず自己の世界を創造して、支配する存在と考えられる。これが、現象面では芸術、技術、社会制度などに現われる。この世界にお

いては、人間は創造者としての神、(究極的規準)に近づくのであって、自然世界の規準となるのみでなく、創造の業に参与する。その意味で人間は自然に対してよりも、もっと完全な意味で芸術、技術、制度的世界の尺度と叫ぶるのである。

### (3) 精神と肉体との統一性の強調<sup>(25)</sup>

しかし、クザーヌスは宇宙における人間の高貴な高い位置を主張すると同時に人間の有する低い部分としての動物性、感覚面も軽視しない。すなわち、人間は物質界、感覚界、精神界に属し、それらを総合統一する存在であるから、人間の動物と共通な部分も、精神と同じく人間の本性の一部と考えるのである。

この点から、クザーヌスは植物と動物の運動に注目し、動物が植物とは異なった高い生命原理(anima)に動かされていることに言及し、さらに人間では肉体は特別に精神的存在に上げられるように、創造主から創造されたといっている。換言すれば、人間が精神を与えられたのは、単に精神が肉体的要求を満すためではなく、肉体が精神と一体となり、精神界に高められるため、そのために肉体の中に精神的本性が降った(descendere)ということになる。

このような人間の肉体をクザーヌスは、「高貴な肉体」と呼び、その理由を、人間の肉体が本来、精神的要素を指向し求めるようにできているということにおいている。そして、人間的肉体がその必要性から理性的本性を要求するように、人間の複雑な精神がやはり、その高貴な肉体、精神的存在である人間にとってふさわしい肉体を要求すると考えている。

精神的活動は、その活動にふさわしい肉体を要求するという考察は、「創造力」を人間の根本的能力とし、創作的作業、芸術品作成を人間の最高の働きと考えるクザーヌスにとっては当然であって、クザーヌスは創作に従事する人間の肉体、特に道具を巧妙に使用する人間の姿を念頭においていたのではないかと思われる。



クザーヌス思想における、人間の精神と肉体との一致は、「一性」と「他性」の原理から理解<sup>(26)</sup>されている。

一性 (unitas) と他性 (alteritas) は、ニコラウス・クザーヌスの思想をなす基本的原理の一つであって、これによって、クザーヌスは、事物の多様性と相違を、形而上学的に説明するのである。この点について、J. コッホは長い研究によって、クザーヌスの哲学的主要著書「知ある無知」(De docta ignorantia, 1440) と、「推測について」(De coniecturis, 1444) には、思想的相違と発展があることを指摘している。すなわち、「知ある無知」においては、存在論的形而上学がまだ認められているが、それがしだいに一性的形而上学<sup>(27)</sup>に変わっていき、「推測について」では明瞭に自己独特の一性的形而上学を示している。

この結果、全存在は四つの異なった一性を有する領域に、上より「神」(Deus)「知性」(intellectus)「魂」(anima)「物体」(corpus) とに分けられる。

神は完全な、最も単純な最高の一性で、一切の他性を排し、あらゆる変化と対立を超越している。そして、これはあらゆる尺度の尺度 (mensura una omnium mensurarum) であり、すべての等しいものと等しくないものの同等性 (aequalitas una aequalium et inaequalium) であり、あらゆる同一物と分離したものの結合 (connexio omnium unitorum et segregatorum) であって、これは丁度、「一」の数が奇数も偶数もその中に包含し、展開<sup>(28)</sup>し、結合するのに似ている。

第二段階の一性は、神的一性の次にくるもので精神的<sup>(28)</sup>一性 (unitas intellectualis) である。この第二の一性は必ず他性を取らねば絶対的<sup>(28)</sup>神的一性から「降る」(descendere) ことができないので、他性と結合した一性であって、この結合は、精神的、知的に (intellectualiter) なされている。

結合は一つのもの<sup>(28)</sup>と他のものから成立っているのであるが、絶対的一性は、ただ、知性的な他性の中<sup>(28)</sup>にのみ分有されるので、(Non est igitur ab-

*soluta unitas nisi in intellectuali alteritate*.) 知的存在者の中のみこの第二段階の一性は見出され、この一性は神の一性に最も近いということになる。

第三の段階には、さらにこの知性的一性がより多く他性に結合して、理性的一性 (*unitas rationalis*) になるのであるが、この理性的一性は更に、第四の感覚的他性の中に受取られそれと結合して第四段階の一性を形成するのである。

クザーヌスによれば、絶対的一性が、次第にその無限性を他性により縮限され、知性的無限 (*infinitas intellectualis*) にさらに理性的無限性 (*infinitas rationalis*) に、最後に感覚的無限性 (*infinitas sensibilis*) に下降してゆく。しかしこの動的な存在の把握は、その流出 (*fluxus*) と還帰 (*refluxus*) という考え方で一層完全に理解される。<sup>(29)</sup>

このような精神と感覚の段階的理解の上にクザーヌスは人間の全体的一性について説明を与える。

知性的な一性は魂 (*anima*) の中に数えられ、これによって魂の中に知性的一性が展開される (*explicatur*)。魂はこのことによって知性的一性の似像 (*Abbild*) となる。しかし、魂の一性と力は、魂自身の中よりは、むしろ身体の中に感覚的な様式で展開している状態で見出される。

また、理性 (*ratio*) は物体状の肉体の根として考えるべきでなく、むしろ知性的な根 (*intellectualis radix*) として、身体に下降する道具として考えねばならない。このように考えると、理性 (*ratio*) は知性の道具 (*instrumentum*) といえることができる。<sup>(31)</sup>

クザーヌスによれば、魂が存在するかどうかということは、疑い得ない事実であって、魂がなければ「疑う」ということも在り得ないということになる。さらに魂に量があるか否かということの問題とすれば、魂に量があるとすると、それは物体的な量でなく、知性の中の数のような量である、とする。<sup>(32)</sup>

そして、生命体の中では、魂は一性の原理として、体は他性の原理として作用する。しかし、魂と体とは、極めて完全に結合しており、その結合をクザーヌスは次のように説明する。

“Omniun autem animalium dum unitatem animam et corpus alienitatem feceris, ea, quae in corpore corporaliter conspicias et *explicate* in anima ut in *complicante virtute* animaliter esse concipe ut in eiusdem corporalis naturae explicatae unitatis *virtute*,

Talibus quidem symbolicis venationibus de corporalis naturae explicatione ad animae *potentiam* ascende, atque cuiuscumque animalis *virtutem* animae ita *complicatam* concipe contracte, uti *explicatam* corporis varietatem coniecturaris.”<sup>(33)</sup>

この引用文より結論されることは、魂と体とは究極的には一つの原理としての「力」、すなわち「エネルギー」として統合され、この一つの根源が「包含的状态」(complicate)にあるのが魂であり、「展開的状态」(explicate)にあるのが「体」である。このクザーヌスの考えは、精神と肉体を極めて近く見るところの立場で、これによって精神と肉体の全人間存在における完全なる結合と、人間全体の完全なる統一性を説明する動的解釈といえることができる。

この包含と展開 (complicare, explicare) の理念は、<sup>(34)</sup>クザーヌスが、全宇宙を絶対的一性(神)の他性における展開として見、また神に万物が包含されるとする、神と宇宙の関係の説明と平行するものであって、人間の身体のあるあらゆる場所に靈魂が存在し働くように、神は大宇宙の中のあらゆる場所に存在し働くのである。この点からも、人間を小宇宙とするクザーヌスの人間論が基礎づけられるのである。

#### (4) 人間の高貴性の強調

クザーヌスは“De ludo globi”の中で価値 (valor) について述べているが、<sup>(35)</sup>その中で、

“Bonum et nobile atque preciosum est esse, ideo omne quod est, non est valoris expers. Nihil penitus esse potest, quin aliquid valeat. Neque reperiri potest quicquam minimi valoris, ita quod minoris esse nequeat,……”

これで明らかのように、クザーヌスは根本的に実在論的価値論 (Wertrealismus) の立場に立っている。しかし、彼は価値の有する主観的面も重視していた。すなわち、存在 (esse) が、知性 (intellectualis naturae) に関係するときに「真」(verum) と呼ばれ<sup>(36)</sup>、また、存在 (esse) が意志 (voluntas) に関係するときに「善」(bonum) と言われる。

“Bonum autem est quod appetitur. Omnia enim bonum appetunt.”<sup>(37)</sup>

しかしクザーヌスは、価値 (Valor) は真および善といくらか相違するものとして把握している。すなわち、価値は、人間の知性と意志の合致したものに直接関係して、その存在の「評価」(aestimatio) を、人間から求めるものである。この「評価」の認識こそ、クザーヌスの価値論の基礎となっているので、そこから、高貴性 (nobilitas) が明らかとなるのである。

“Et quamvis intellectus non det esse valori, tamen sine intellectu valor discerni etiam quia est non potest. Semoto enim intellectu, non potest sciri an sit valor. Non existente virtute rationali et proportionativa, cessat aestimatio, qua non existente, utique valor cessaret. In hoc apparet preciositas mentis, quoniam sine ipsa omnia creata valore caruissent……”<sup>(38)</sup>

ここで注目すべきは、クザーヌスが、「理性的な比較する能力が存在しなければ、評価もなく、その評価がなければ価値もなくなる」とまで価値を理性の比較評価能力に置いていることである。これによって、クザーヌスが価値を、人間の欲求を満す善と、それが、他の善とどのような比例関係にあるかを認識する理性との合致としての人間能力による、事物の評価においていることが明らかとなる。さらに、クザーヌスは、硬貨の価値を

例にひいて、事物の価値を説明しているが、事物の眞の価値、客観的価値の規準は、全能の硬貨製作家になぞらえられる神であって、その規準にしたがって、事物は一定の価値をもつもの、すなわち、理性的存在より一定<sup>(39)</sup>の評価を要求するものとして創造されたのである。

評価されるものは、評価するものにとって同時に「善」として認められ、その追求の対象となるのである。「気高いもの」(honestum)はクザーヌスによれば、善の上に更にあるものを加えたもので、それは、「崇高さ」「尊敬すべき性質」(dignitas)で、人より高く評価され、人を魅きつけるのである。<sup>(40)</sup>

クザーヌスは、さらに「美」を説明して次のように述べている。美は「輝き」(resplendentiam)と明らかさ(claritas)を「均整」(proportio-nata)の上に加えるので、それは、人間の目的となり、「善」と呼ばれる。そして事物に形相(forma)が適合するかぎり、調和と一致が存在する。その結果、そのような「善」「気高さ」「美」が小数の事物の中にしか存在しないほど、そのものは、より価値が多くなるのである。<sup>(41)</sup>

また、「存在」「善」「生命」や「美」に深い関係を持つものが、「平和」と「秩序」であることをクザーヌスは、指摘している。<sup>(42)</sup>そして、「平和」と「秩序」が、事物の価値を決定する要因になるとして、

“Locus substantiae est pax, quanto res stabiliorem pacem participat, tanto nobilior. Unde de pace sicut de bono et vita considera. Prudentia spiritus: pax et vita, sapientia igitur in spiritu est pax eius et vita”<sup>(43)</sup>

と述べている。特に「平和」と「秩序」が相等性(aequalitas)と関係をもち、ここからこの両者が、あらゆる事物が存在し保たれる根拠となり、「美」と「調和」と「喜び」と「愛」も、同じように事物の存在と保全に必要な要素である。

この観点から、クザーヌスは、人間がその存在の中に存在しているかぎり、精神的存在として、善、生命、秩序、調和、平和をもっており、この

理由で人間の価値は、この宇宙の中で、神に次ぐ「気高い」存在として主張しているのである。<sup>(44)</sup> またここから人間の価値がその人のもつ内的調和と秩序をつくる統一性によることも明らかとなる。

ニコラウス・クザーヌスは、世界を価値的な段階に分けるのであるが、その中で特に存在価値の高いものを指摘している。もつとも価値の高い存在は、創造者の神とその本性である。そして神は、「最も高貴なもの、最も完全なもの、最も自由なもの」と呼ばれる。<sup>(45)</sup>

また、神の次に人間の精神 (spiritus hominis)<sup>(46)</sup> と知性 (intellectus) は、高貴なもので、それは精神がまず「自主性」を有するためである。換言すれば精神は、本来、自分が同意しなければ、いかなるものにも服従しないからである。その外、精神が自己認識を自己の本性の究極目的と創造主のもとでの永遠の生命を追求していく本性的欲求を持っているからである。そして知性は、芸術と学問の中に自らの力を現わし高貴な概念を生み出し、自己を意識し、反省すると共に自己の原因である神を理解することができるという点から高貴な存在である、とクザーヌスは述べている。<sup>(47)</sup>

また、知性の外に、自由意志も高貴な存在である。

“Et est amoris natura: libertas, nam libere movetur amor ob nobilitatem suam, nec potest cogi, et si subest coactioni, non potest esse verus amor sed simulatus. Natura amoris puri est libera, et natura eius converti in amatum.”<sup>(48)</sup>

神は、知性的被造物を自由の能力を持つものとして創造した。そして人間は自由意志なくしては、神の高貴な被造物であることはできない。そしてまた、このような高貴で自由な被造物が神の光栄のために、必要なのである。<sup>(49)</sup>

人間の価値は、形而上学的に見れば、実体 (substantia) という自己自身の中に存在する特徴の中であって、偶有 (accidentia) は実体の存在により多く参与するほどその価値を増し、高貴なものとなる。

“Et hinc est quod accidentia quanto magis participant substantiam, sunt nobiliora, adhuc quanto magis participant substantiam nobiliorem tanto adhuc nobiliora.”<sup>(50)</sup>

クザーヌスは、人間の価値を現わすために、「人間は高貴な動物である」(Homo est animal nobile.)<sup>(51)</sup> という形式を用いている。また、“Compendium”には、人間は完全な動物である (animal perfectum) という表現もあるが、これも人間の価値を表わしている。

さらに、クザーヌスは、動物と人間を比較してその価値を示し、

“Homo positus est in medio inter superiorem, est enim supra omnia animalia.”<sup>(52)</sup>

と述べているが、また動物が持っていない完全な、不滅への望みと理性的生命を人間が所有していることを述べ、

“Homo autem habet vitam, non igitur vellet homo aliud quam habere perfectam et indeficientem vitam, et quia perfectior est vita rationalis sensibili quam habent et bruta, tunc in vita rationali vellet habere perfectionem, potius enim vellet homo non esse, quam non esse animal rationale, quia non est appetibile per hominem quod sit brutum alterius speciei. Appetit igitur omnis homo, in sua humanitate habere perfectam rationalem et indeficientem vitam, sic appetit intelligere perfecte omne intelligibile.”<sup>(53)</sup>

と言う。そして、動物が、理性、知性、自由意志をもたないことを、人間との本質的相違とし、<sup>(54)</sup> さらに動物が芸術や倫理、神の認識や神への傾きを有しないことを人間との根本的差違として指摘しているのである。<sup>(55)</sup>

##### (5) 個別性の強調

クザーヌスは、個別的存在を強調して、現実に存在するものは、個体のみであるという原理を主張する。この説明として、幾何学的考察、すなわち点、線、平面というものは、ただ物体においてのみ存在するのであると

述べる。しかし、「知ある無知」においては普遍的なもの (universalia) と思考上の有 (ens rationalis) とを明らかに区別する。即ち

“Universum enim quia non est actu nisi contracte, ita omnia universalia: non sunt universalia solum entia rationis, licet non reperiuntur extra singularia actu; sicut et linea et superficies, licet extra corpus non reperiuntur, propterea non sunt entia rationis tantum, quoniam sunt in corpore sicut universalia in singularibus.”<sup>(56)</sup>

“Omne ens in propria sua entitate est uti est, ita in alia aliter.”<sup>(57)</sup>

ただし、クザーヌスの個別化に関する考えはその後に書かれた「推測について」(De coniecturis) においては、J. コッホが指摘するように、存在論的形而上学より一性論的形而上学に発展変化するのである。J. コッホは「知ある無知」と「推測について」を徹底的に比較研究して、前者には範疇より類・種を経て個体にいたる下降の秩序の考えが見られるが、後者は、神、知性、魂、物体の秩序のみしか主張されていないと述べる。

この下降は、クザーヌス哲学では縮限によって説明されるのであるが、この縮限は、前者では形相質料の相関的關係に止っているが、後者においては、一性 (unitas)、他性 (alteritas) によっていることをコッホは証明している。クザーヌスによれば、形而上学的に一性の原理は自己同一性 (Identität) を示し、他性は、多様性 (Vielheit) 分割性 (Teilbarkeit) 変化性 (Vergänglichkeit) 恒常性 (Unstetheit) などの原理ともなる。このような考察は、クザーヌスにおいては、数の考察より由来したと J. コッホは述べる。<sup>(59)</sup>

かかる形而上学的な内的発展をもつクザーヌスが、個別性 (Individualität) を理解するにあたって「一性」の概念を中心とするのは、当然であると思われる。彼によると、個別性は、先ず一性を前提としている。しかしこの場合の一性は、概念における論理的な一性でなく、実際に (actu) に存在するものの一性である。さらに、この一性は、固有のものであって、



他の存在と共通であってはならない。すなわち、不可分与的一性（*unitas incommunicabilis*）<sup>(61)</sup>であり、またさらに、多様化と反復の不可能な一性（*unitas immultiplicabilis et irrepetibilis*）<sup>(62)</sup>である。このような一性については、“*unitatem esse ipsam identitatem incommunicabilem, inexplicabilem, atque uti est inattingibilem*”<sup>(63)</sup>と述べている。

個別化の原理についてのクザーヌスの説明は、伝統的なアリストテレス・トマス主義の質料個別化説より違った原理の追求にあるように思われる。Ch. フンメル氏は「個別化の原理についてのクザーヌスの問題は、アリストテレス的スコラの個別化原理より全く異って考えられており、クザーヌスがスコラ的思考形式を応用するところでは、（勿論、これは例外的なことであるが）結果は不十分である、<sup>(65)</sup>」と述べ、クザーヌスの個別化は、偶然（Zufall）という原理によって説明されており、不明瞭な逃避的解決（Notlösung）であると判断しているが、このフンメル氏の判断は、クザーヌスが未だ、その形而上学的原理を明らかにしなかった期間の「知ある無知」のテキストに重点を置いているように思われる。氏が若し、「推測について」の個別化原理を主要点とすれば、クザーヌスが、一性・他性の原理によって個別性を説明し、その究極の原理が、無限の知性をもって個々の事物を知り創造する神であるとしていることが、認められるであろう。この「他性」は、純霊的存在も、等しく一貫して規定する原理であるから、むしろ、プロチノスにおける個体的形相、あるいは、ドン・スコトゥスの“*haecceitas*”に近接するのではないかと推定される。

この個別化の原理を人間に適応するとき、クザーヌスにおける個人の重視、その主体性の強調がでてくるのであって、またJ. コッホが指示するように、これが、クザーヌスの具体的存在と個人の哲学を生んだのであって、ライプニッツ、カント、特に前者のモナドロジーへの道を拓き、またクザーヌスの宗教寛容論が生まれたのである。

#### (6) 神の似像としての人間

クザーヌスの人間観を貫く主要思想の一つは、キリスト教の伝統的な「神の似像」としての人間の考えであって、クザーヌスはこの思想を教父、特にアウグスチヌスより継承している<sup>(66)</sup>。しかし、クザーヌスは人間の知性を神の似像として考えるのみでなく、むしろ霊肉よりなる人間全体、小宇宙としての人間を「神の似像」とするのであって、明らかに

“Hominem autem tanquam mixtum ex corpore et spirctu ad imaginem et similitudinem suae sanctae trinitatis et essentiae creavit ……  
etc”<sup>(67)</sup>

と述べている。その外にも、人間の<sup>(68)</sup> 霊魂、<sup>(69)</sup> 精神、<sup>(70)</sup> 知性 (intellectus) 理性<sup>(71)</sup> (ratio) <sup>(72)</sup> 人間性を神の似像と呼んでいる。

#### (7) 創造的人間観

他のルネッサンス思想家の如く、クザーヌスは、中世末期における特別な人間観を、人間の創造的能力に置いている。人間はこの自己の固有の領域で新しくものを、創造し、神の創造の御業に協力参与するのであって、クザーヌスが人間を、「小宇宙」「第二の神」「神の似像」と呼ぶのは、この点に理由がある。勿論クザーヌスは神の創造と人間の創造は異なることを認め、前者は現実的存在と自然的事物を創造の対象とするが、後者は、<sup>(73)</sup> 思想上の有と人工的事物の創造である、とするのである。

クザーヌスは、人間の創造的作業を分析して、人間の創造の行為は、人間の内に存在する力の展開であり<sup>(74)</sup>、人間の創造的な力は、芸術の中にもっとも明らかに現われると考えている<sup>(75)</sup>。芸術において、人間の精神は先ず自然の中に、文学における文字とか音楽における音のような材料のみでなく、それが合して形成している形相的要素であるその結合のしめす調和、美を発見する。この自然の構造の中には、より美しい自然になろうとする可能性と傾向が含まれているのであって、これは創造主たる神より自然の中に与えられたものであり、人間の精神は、これを発見し、実現に導くのであって、人間はかくして、神の創造の御業の協力者になるのである<sup>(76)</sup>。

このようにして、人間は自然の中に隠れている力を解放し、それを新しい美と完全性に導き、素材を分解して、新しい統一性に結合するので、この結合が人間の創造により、世界の中に新しく生れるのである。<sup>(77)</sup>それゆえ、人間の創造は自然に対して暴力的なものではなく、自然を鼓舞し、自然の可能性を助けるものであるといえるのである。<sup>(78)</sup>

## 結 び

クザーヌスの人間観の歴史の中での貢献は個人としての人間、宇宙の中における特殊な意義を強調したことであるが、さらにその根拠として、伝統的な「神の似像」としての人間と創造的人間を示したことである。この創造的な力をもつ、個別的一性としての人間であればこそ、クザーヌスは人間を高いモナド、ミクロコスモスと呼ぶのである。

最後に、この点について、J. コッホの言葉、即ち「ライブニッツの哲学、とくにそのモナド論には、『推測について』を憶い出させるもの、すなわち、基礎的概念としてのモナド、個別存在における、それぞれの様式による宇宙の反映、一貫した連続性の法則などが発見される、……もっと興味深いものは、カントがクザーヌスを全く知らなかったにも拘らず、この著書（『推測について』）が、カントの純粹理性批判に到る線であるとい<sup>(78)</sup>うことにある。」を引用して、クザーヌスが中世と近世の人間観を結ぶ上に非常に大きな意義をもっていることを指摘して、論を閉じたい。

## 註

- (1) H. Meyer, *Geschichte der abendländischen Weltanschauung*, Bd. 4, Ferdinand Schöningh, Paderborn, 1950, S. 2 ; Cf. K. H. Volkmann-Schluck, *Nicolaus Cusanus*, Frankfurt/M. 1957, P. 146—158
- (2) ピコ・デラ・ミランドラ著、植田敏夫訳「人間の尊厳について」創元社、昭和25年、P. 105—6
- (3) E. Vansteenberghe, *Le Cardinal de Cues*, Paris, 1920

- (4) 前掲書, P. 346
- (5) K. H. Volkmann-Schluck, Nicolaus Cusanus, die Philosophie im Übergang vom mittelalter zur neuzeit. Frankfurt/M. 1957, S. 9
- (6) E. Hoffmann, Cusanus-Studium, I, Das Universum des Nikolaus von Kues, Sitzungsberichte Heidelberg. Akad. Wiss.-hist. Kl. 1929—30
- (7) B. Groethuysen, Nicolaus von Cusa: Philosophische Anthropologie, in: Handbuch der Philosophie u, A. Baeumler u. M. Schröter, München und Berlin, 1928, S. 149—159
- (8) B. Groethuysen: 前掲書, S. 155f.
- (9) B. Groethuysen: 前掲書, S. 158
- (10) B. Groethuysen: 前掲書, S. 156
- (11) M. de Gandillac, La philosophie de Nicolaus de Cues, Paris (Aubier), 1942, Nikolaus von Cues, Studien zu seiner Philosophie und philosophischen Weltanschauung, deutsche Übersetzung von K. Fleischmann, Düsseldorf (Schwann), 1953
- (12) K. H. Volkmann-Schluck, Nicolaus Cusanus, Die Philosophie im Übergang vom Mittelalter zur Neuzeit, Frankfurt/M. 1957
- (13) Ch. Hummel, Nicolaus Cusanus, Das Individualitätsprinzip in seiner Philosophie, Bern-Stuttgart, 1961
- (14) R. Weier, Anthropologische Ansätze des Cusanus als Beitrag zur Gegenwartsdiskussion um den Menschen, in: Mitteilungen und Forschungsbeiträge der Cusanus-Gesellschaft, Bd. 7, Mainz, 1967, S. 84—102
- (15) Nicolaus Cusanus: De docta ignorantia III, 3, HCO I P. 126, 29—P. 127. 21: De coniecturis II, 14, P I f, 60r, 7—14
- (16) Nicolaus Cusanus, Sermo: constituite diem solemnem (Koblenz, 25, 3, 1444) P II f. 50v. 35—44
- (17) Nicolaus Cusanus, Sermo: Sedete quoadusque (Mainz, 6.6.1446) P II f. 57r. 14—18
- (18) Nicolaus Cusanus, Sermo: Suscepimus deus misericordiam tuam (Brixen,

2. 2. 1455) P II f. 93r. 5-13
- 19) Nicolaus Cusanus, De venatione sapientiae cap. 32. P I f. 214 v. 20-f 215 r. 3
- 20) Nicolaus Cusanus, De coniecturis II, 14. P I f. 60r. 7-14 cfr. J. Koch, Die Ars coniecturalis des Nikolaus von Kuës S. 17
- 21) Nicolaus Cusanus, De ludo globi I, P I f. 159r 32-39人間の自由について, Nicolaus Cusanus, Sermo : Spiritus autem paraclitus mittet pater(Brixen, 25, 5. 1455) P II, f104v.25-26 ; Intuimini quantum sit iste (Brixen, 23,12,1453.) P II f. 79v. 10-19. Confide filia, fides (Brixen, 22, 2,1444), P II f. 71r. 13-16etc.
- 22) Nicolaus Cusanus, De Beryllo 36, HCO XI/1 P.48, 14-17
- 23) Nicolaus Cusanus, Sermo: Qui credit in filium dei (Innsbruck, 13, 4. 1455), P II f, 112r. 17-26 : cf. Spiritus autem paracletus quem mittet pater (Brixen, 25, 5. 1455) P II f. 104v. 7-44
- 24) Nicolaus Cusanus, De Beryllo 37. HCO XI/1 P. 51, 6-17
- 25) Nicolaus Cusanus, De coniecturis II, 10
- 26) 前掲書 参照
- 27) J. Koch. Die Ars coniecturalis des Nikolaus von Kues, Arbeitsgemeinschaften : H. 16, Köln und Opladen, S. 15-16; 坂本堯「ニコラウス・クザーヌスのキリスト論とその思想的背景」カトリック神学, 15号1969, 6月 63-65頁迄参照
- 28) Nicolaus Cusanus, De coniecturis. I, 7
- 29) Nicolaus Cusanus, De coniecturis. I, 7
- 30) Nicolaus Cusanus, De coniecturis. I, 9
- 31) 同上 参照
- 32) 同上 参照
- 33) Nicolaus Cusanus, De coniecturis II, 10
- 34) 大出哲, “De Docta Ignorantia における万物の展開と包含について”『中世思想研究』Ⅳ号, P. 88-101参照

- 35 Nicolaus Cusanus, De ludo globi II. P. I, f. 167r-167v
- 36 Nicolaus Cusanus, P. II. f. 143v-Excit III.
- 37 Nicolaus Cusanus, Cribratio Alchoran II. 6.
- 38 Nicolaus Cusanus, De ludo globi II. P. I. f. 167v
- 39 同上 参照
- 40 Nicolaus Cusanus, Tota pulchra est amica (Brixen, 8, 9, 1456の説教)
- 41 同上 参照
- 42 Nicolaus Cusanus, Pax hominibus bonae voluntatis (Brixen, 25, 12, 1454の説教, Deus in loco sancto suo, (Utrecht, 29, 8, 1451の説教) 参照
- 43 同上 参照
- 44 Nicolaus Cusanus, De eo quod scriptum est Vita erat lux hominum (de aequalitate,)
- 45 Nicolaus Cusanus, Cribratio Alchoran 3.
- 46 Nicolaus Cusanus, Sedete quoadusque (Mainz, 6. 6. 1446の説教) “Sed quia homini praeest et nobilis spiritus..., habemus spiritum, qui est liber, altus, et nobilis, qui nulli rectori subest nisi se subiiciat per consensum, Mitto angelum meum ante faciem tuam (Brixen, 14, 12, 1455の説教)
- 50 Nicolaus Cusanus, De docta ignorantia I, 18
- 51 Nicolaus Cusanus, De concordantia cath. III, 23
- 52 Nicolaus Cusanus, Promisi hodie (Brixen, 7, 4, 1454の説教)
- 53 Nicolaus Cusanus, Confide filia: fides (Mainz, 22.11.1444の説教) Idiota de mente 5; Tota pulchra est amica (Brixen, 8, 9.1456の説教)
- 54 P. T. Sakamoto, Die Würde des Menschen bei Nikolaus von Kues, Düsseldorf 1967. S. 135-146, u. S. 147-161
- 55 Nicolaus Cusanus, De docta ignorantia II, 1, HCO I P. 61, 22-P. 62. 11; ibid II, 6, HCO I P. 80, 8-21
- 56 Nicolaus Cusanus, De docta ignorantia II, 6, HCO I, P. 80
- 57 Nicolaus Cusanus, De coniecturis I, 13. P. I. f. 47r. 29-32.
- 58 J. Koch, Die Ars coniecturalis des Nikolaus von Kues, Köln und Opla-

- den, 1956
- 59 J. Koch, 前掲書, S.19-20
- 60 Nicolaus Cusanus, De venatione sapientiae 22. P I, f, 209v. 45-f. 201r. 10
- 61 Nicolaus Cusanus, De visione dei. 14, P I, f106v, 6-18.
- 62 Nicolaus Cusanus, De venatione sapientiae 22. P I, f, 210r. 14-18
- 63 Nicolaus Cusanus, De docta ignorantia III. 1. HCO I P. 121, 27 -P. 122, 14 ; P119. 4-15
- 64 Nicolaus Cusanus, De coniecturis I. 13, P I f, 47v. 29-32
- 65 Ch. Hummel, Nicolaus Cusanus. 前掲書, S. 77-80
- 66 Nicolaus Cusanus, De concordantia cath. I. HCO XII/I S. 45, n, 23, 5-10
- 67 Nicolaus Cusanus, Sermo: Hoc facite in meam commemorationem (Brixen, 30. 5, 1456) P II f, 31v. 23-32及び註 67参照 ; de genesi II, HCO IV S. 114. n, 158, 7-11
- 68 Nicolaus Cusanus, De eo quod scriptum est Vita erat lux hominum. (de aequalitate)
- 69 Nicolaus Cusanus, De visione Dei 25, P I ff, 113v, 1-46, (mens) Nicolaus Cusanus, Idiota de mente 5. HCO V. S. 62, 12-P. 63, 9. (P. 59, 5-P. 60. 5), De coniecturis I. 3. P I f, 41v. 41-44.
- 70 Nicolaus Cusanus, De coniecturis I. 13. P I f, 48r16-22 ; De beryllo 6 HCO XI/1 P. 7, 7-20
- 71 Nicolaus Cusanus, De coniecturis I, 9, P I f. 44v. 26-32
- 72 Nicolaus Cusanus, Sermo: Ostendite mihi numisma (Brixen 31. 10 1456) P II. f. 148r 32-43.
- 73 Nicolaus Cusanus, De beryllo 6, HCO. XI/1 P. 6. 6-20
- 74 Nicolaus Cusanus, De coniecturis, I. 3. P I. f. 41v. 40-f, 42r, 4 ibid P I f 42r. 13-14
- 75 Nicolaus Cusanus, Sichtung des Alchoran II, 4. DH, 7. P. 187-188
- 76 Nicolaus Cusanus, Compendium 2. HCO XII<sub>3</sub>n4. 9-n. 5, 8. ibid n 27. 7-

13 : De ludo globi, I . P I f 157v. 23-30

77) Nicolaus Cusanus, Idiota de mente.7. HCOU. P. 77. 16-23

78) Nicolaus Cusanus, Compendium 7. HCOXI<sub>3</sub> n. 19.1-8

79) J. Koch, 前掲書, S. 47-48

〔省略記号〕

f. = folium

HCO = NICOLAI DE CUSA OPERA OMNIA IUSSU ET AUCTORI-  
TATE ACADEMIAE LITTERARUM HEIDELBERGENSIS AD  
CODICUM FIDEM EDITA (IN AEDIBUS FELICIS MEINER)

n = numerus

p = NICOLAI CUSAE CARDINALIS OPERA PARISIIS

1514 Unveränderter Nachdruck Minerva G. m. b. H. Frankfws/M. 1962

r = latere recto

v = latere verso